

講演

森戸辰男氏と広島大学

西村 博

ご紹介に預かりました西村でございます。ただいま大林・小池両先生からのお話をお聞きしながら、広島大学草創の頃から、既に半世紀が経とうしているというこの重みを改めて考えさせられておりました。言うまでもなく、創立以来五十年というのは膨大な時間の蓄積でございます。私共が体験致しました創立当時の事象や経緯につきましても既に忘却の域に達しているものが多々ございます。その上に日記をつけたりメモをとったりするような性格ではございませんし、大学に在学しておりました頃の手帳も全て始末しておりますので、この度、先生方から、「一度広島大学に来て当時のことを話してくれ」というお話がございましたが、五十年史の編纂にお役に立つようなお話はとてもできないと思っております。それでもせっかくのお誘いだから、と考え直しまして、懐古談を交えながら、その間に若干思い出したことなどを皆様にお話を申し上げることができたらと思いい直しで参上致した所でございます。かような事情でございますから、申し上げることに辻褃の合わない所も出てくるかとも思いますが、お許し頂きたいとお願いを申し上げます。

一、森戸辰男氏と広島大学の関わり

(一) 学長就任受諾の経緯

それでは、皆さんのお手元に差し上げました私のメモに準じまして、思い出すままにお話をさせて頂きたいと存じます。

森戸先生が広島大学長に就任なされました経過とその間の事情等につきましては、先生が日本経済新聞に連載されて、後に一冊の本になりました『私の履歴書』等に、先生ご自身が詳しくお書きになっておられますので、私から改めて申し上げるつもりはございません。ただ、先生が広島県のご出身であり、戦前に革新的な新進の学者として注目されたお人であること、かつ文部大臣という重職に就任をされまして、わが国の文教政策、特に学制改革に重要な役割を果たされた方であり、また郷党の先輩として広島大学の創立時のご相談にも関与し、なかなく学長候補者についても、新制広島大学の学長さんをどなたにお願いすればいいかというご相談を受けられ、何人かの方々を大学にご推薦された経緯があるということは広島大学にとっても、先生にとっても意義深い役割を分担されていたことであると思っております。

## ①大学側の事情と要請

先生は、かねてから県当局の方々、あるいは大学当局の方々から、国会議員を辞めて是非郷里の新制大学の立ち上げに力を貸して欲しいというご要望を受けておられました。選挙後間もなくのことでもございましたし、強くまた新しい日本を作ります際の国会議員としての役割についても心を惹かれると同時に、強い責任感をお持ちでございましたから、度重なる要望にもかかわらず一貫して辞退をされておられました。そうこうするうちに、「広島大学二十五周年史」にも書かれておりますように、学長候補者の辞退が相次ぎ、新制大学の発足に支障を来すという緊急事態も考えられ、「この際は是非とも森戸氏を」との声を背景に、文学部長兼政経学部長でございました渡辺鼎先生が、大内兵衛先生をお頼りになって、先生のお宅にお通いになられるようになりまして。森戸先生がその熱意に打たれて、一年間ぐらいは考えさせてくれという期間もございましたが、決心をされて広島大学に来られるようになりまして。その心情を私なりに考えますと、一つは広島大学をめぐる環境がいろいろと切迫をしていたことがあったのではないか、と思います。それは大阪商科大学の恒藤学長さんとか、立命館大学の末川総長さんとか、数人の候補者の方々全てご辞退をされました。なかなか適任者が見つからないということ、一方、学内から学長を選ぶという選択肢はほとんど不可能に近いということだったと思います。皆さんご承知のように、広島大学はたくさん学校の集合して発足ということになりましたので、なかなか統一された意志の決定ということが難しかったような感じが致します。常識的に考えて、

学内から選ぶとすれば、当時、広島文理大の学長さんでございました長田新先生が浮上してくる所でしょうが、日本の教育界でもペスタロッチー研究の第一人者でいらっしゃった長田先生につきましても、先生自身が諸々の環境をご推察されて、ご自分から学長候補を降りられるという状況の中で、学内から統一された学長さんの推薦がなし得なかつたように思います。

他方では、新制大学発足につきましては、だんだんと時間的な進行が迫りまして、学内にはかなりの焦燥感があったのではないかと思えます。かような客観的な情勢の下、学内のみならず、森戸先生を代議士にかついで郷土の方々におかれましても、「是非戻って来て欲しい」という要請が高まりまして、情勢が急速に変化をしてきたように思えます。特に学内では、大学の推進本部長でおられました理学部の藤原武夫教授を中心にして、先生をかつぎ出すことにいろいろと力を尽くされたように思いました。それと同時に文部省内部でも、広島大学のためにも、そして新制大学全体のためにも是非お帰りになって、大学建設という大事業を引き受けてもらいたいというお勧めもだんだん高まりました。特に広島出身の伊藤日出登文部次官〔注：昭和二四年三月一〇日〜二五年五月一三日の間文部事務次官〕が熱心に先生を口説かれたといえますか、お勧めの役割を演じられておりました。

## ②日本社会党分裂の影響

そのような学内外の要望の高まりとは別に、先生ご自身にも環境の変化があったことも忘れるわけには参りません。その一つは日本社会党の左右対立と分裂という問題です。先生が出馬された選挙は、終戦

後の第一回の昭和二十二年四月、第二回の二十二年四月、その次は二十四年一月と、合計三回の衆議院議員選挙に立候補され当選をされました。

その間、二十二年六月から二十三年三月まで、片山内閣の文部大臣を引き受けられ、引き続き二十三年三月から二十三年一〇月まで、芦田内閣の文部大臣をお勤めになられました。昭和二十四年一月の総選挙で日本社会党が惨敗を致しました。それを契機にして社会党の運動方針をめぐる左右の対立がいろいろと顕著になってまいりまして、党の再建大会を目前にして、森戸・稲村論争が展開されました。これは、当時の社会党の左右両派の論客同士による運動方針をめぐる論争で、突き詰めて言えば、社会党は今後、国民党への脱皮を目指すのか、階級政党として生き残るのかという論争でございました。

森戸先生は階級そのものよりも、階級を包み込む民族や祖国というものの重さを考えなければならぬという社会党右派の思想的な支柱でいらつしやいました。左派の方が若干優勢な社会党の現状の中での、日本社会党の現状と推移に不満と焦燥を募らせておられたように思われます。

### ③選挙資金増大に関する嫌悪

また選挙資金に関する嫌悪感が次第に先生の心の中に高まっていたのではないかと私は推察を致します。先生の選挙は郷党の応援による手弁当の選挙で、まさしく理想選挙でございましたけれども、私の聞きました所では、第一回目の立候補の時には五万円、その次には一〇万円、その次には二〇万円と、倍々ペースで選挙資金が要るような状況にあったそうです。五万、一〇万、二〇万というお金は選挙資金規

制法のもちろん枠内でございましたし、そのような理想選挙をされた方はほんの数えるほどしかおられなかったのですが、このような状況に嫌気がさされていたのではないかと思います。森戸先生のそれまでの生活は東京帝国大学助教としての収入、それから大原社会問題研究所の研究者としての収入によって賄われていて、学者としての歩みしかされておりませんでしたから、お金の差配といいますが、金銭面についてはほとんどご自分で干渉されたことも期待をされたこともありませんでした。いわば金銭に対する才覚というものをほとんど持ち合わせない性格の持ち主でありましたから、政治家になって急に政治資金・選挙資金を準備しなければならなくなったことに対するお悩みは人一倍であつたらうと推測されますし、これは奥様も同様でした。今日、森戸文庫として広島大学にご寄贈されました貴重な先生の本、中にはマルクスの『資本論』の初版もございましてと思えますが、それらの本を売って選挙資金を作ろうかと思積もられたこともございました。弟子たちや周囲の方々がそこまでする必要はないだろうとお諫めして売却を思いとどまった本が、今日、広島大学に寄付されて貴重な文献になっているのです。

### ④教育への熱意と希望

もう一つの理由として、先生ご自身が文部大臣としてのお仕事を通して教育、特に青少年の育成に関して非常に関心をお持ちになっていた、ということがあると思います。ご承知のように先生が文部大臣の時に、六・三制をはじめとする、戦後日本の学制改革に手が付けられ始め、先生はこのことに非常にご苦労なされたわけですから、自分が

作った制度の中身を、教育の現場で身をもって確認してみようと思われて広島大学行きを決心をなされたのではないかと思えます。

しかし、先生は政治に関心を失われたわけではございませんでした。先生の身近にいた私としては、学長を辞めた頃にもう一度政界に戻りたいという気持ちが先生の心の中に秘かにあったのではなからうかと推察を致しております。ただ先生は、政党中心になつてしまつた参議院の構成と性格には非常に懐疑的な思いを持つておられましたので、参議院が主として各界の代表によつて構成され、かつての緑風会的な性格を取り戻す機会があれば、自分も教育界の一員としてもう一度政治の世界に戻りたいというお気持ちが心の底にあられたように私は考えております。

## (二) 東京から、広島へ

### ① 前例のない議員辞職演説

いずれに致しましても、ただいま申し上げましたようないろいろな環境及び心境の変化が先生の心を動かし、郷土広島の方々のご要望を直接のきっかけとして、昭和二五年四月一五日付で衆議院議員の辞任届を提出なさいました。先生は日本社会党に所属されておりましたが、そのお人柄と、国会における憲法小委員会の委員や、あるいは文部大臣というような重要な役割をも果たされておりましたので、党派を超えて辞任を惜しむ声が多くございました。そこで通常の形でございませと衆議院本会議での議員辞任の議決を経て退任するという形が通例であったのを、当時の衆議院議長でございました幣原喜重郎先生が特

別の計らいをされまして、特別に先生にお別れの演説をする機会を与えて頂きました。これも未曾有のことであつたように私は思います。衆議院本会議議事録のこの部分は、既に五十年史編集室に寄贈させて頂きましたが、その中身について、ごく簡単に紹介をさせて頂きます。森戸先生はこう演説されています。

実は昨春以来、広島大学から、また選挙区を含む広島県民ならびにこれを代表する地位にある人々から、再度学長就任を懇請されました。しかし諸種の事情から私は、これを固辞して参りました。しかるに、今回熟慮の結果これを受諾するよう決意をいたしましたのは、おもに次のような事情によるのであります。

第一に、広島は私を育ててくれた、なつかしい郷里であります。それに国会に送つた選挙区の人々が私の就任を強く要請しているからであります。このいわば地方的な事情は別と致しまして、次に私は、青年とその教育に対して特別の熱情と関心をもつて参りました。しかも、それは個人的な好き好み以上に日本の再建は青年の向背にかかるといふ私の確信からであります(拍手)。そして大学こそは、教員養成をその重要な使命と致しております広島大学こそはその最適、最高の場の一つと申してよろしいのであります。

最後に、平和日本にとつて広島は特別の意義をもつております。広島は日本一の軍都でありましたが、昨年皆さんのお力によりまして、代表的な平和都市となりました。世界的に見ましても、原子力

時代の世界の平和運動は、今日、ノー・モア・ヒロシマズ、もはや広島の惨劇を繰り返すなということのスローガンとしております。かような意味で、日本において代表的な、そして今や世界的に見ても重要なこの平和都市は、それにふさわしい平和主義に立つ立派な大学を持つべきであります。かような大学をつくりたいというのが、年来平和主義とユネスコと世界連邦の運動に強い関心と努力を払って来た私のささやかな念願でございます。

もちろん学長就任につきましては、私の先輩、同僚の間に、学長には、別に人があろう。君のような人間はやゝ場違いかもしれないが、それだけにどうしても政治にとどまつてほしいという強い勧告をする人も少なからずありました。実際私といたしましても、今回議員を辞任し、政界を離れまするにあたりましては、まことに感慨無量なものがあるのでございます。(後略)

## ②先生のお伴をして広島に

先生は四月二三日に広島大学に着任されました。私も先生のお供をして広島に来ましたが、私が先生のお供をするにあたっては次のような経緯がありました。

先生が広島大学学長をお引き受けになられた時、奥さんが、「誰が広島に、主人の相談相手として付いて行ってくれるんだ」と、お弟子さんや先生の周囲におられます方々にご相談をされたのです。その時に弟子の中で独身でございましたのが私と、それからもう一人、須之内英夫さんという先生の書生をしながら、東大の国文科を卒業して、

文部省の国語課に勤務されていた方でした。それでいろいろ皆さんがご相談されまして、私に、「西村君、君が先生にお供して広島に行ってくれ」ということが決まったようで、衆議の結果、私が先生のお伴として広島に来ることになったのです。当時私にも、出身大学〔注：日本大学法学部〕の労働法講座の助手に残れというお話があったのですが、先生から「もしも広島に一緒に行ってくれるのなら、大変だろうが労働法の研究者と自分の相談相手と二股の仕事をしたらどうだ」というご提案をして頂きましたので、私も決心をしたのでした。

## (三) 広島生活の始まり

### ①住まいのこと

そうやって、先生と私の、広島での共同生活が始まりましたが、広島で生活を始めた頃の思い出といえば、何といつても住む所に関するものです。

大学側との最終打ち合わせが東京の羽沢ガーデンという、広島県出身の方が経営されております割烹旅館で行われました。大学からは事務局長、庶務課長、藤原教授その他何人かの方々がおいで下さいまして、広島での仕事や生活についての打ち合わせをしました。その際、私は先生の奥様から言いつかっていたことがありました。奥様は、「西村さん、広島での暮らしの基礎になる住居などの問題、それから待遇条件などについて、よくお聞きして下さい。主人はほとんどそういうことについて心配りを持たない人ですし、ましていろいろと尋ねたりする人じゃありませんので、あなたがよく聞いてきて私に教えて

下さい」と言われていたんです。しかし食事が終わりますと、大学側の方が、「西村さん、これからいろいろ大学のお話をしなければならんけれども、先生は私どもがお宅までお送りしますから……」と言われて、有り体に言えば、まあ私に先に帰って、ということでございます。したので、私は心ならずも先に帰ってしまったのです。

そのせいかどうか分かりませんが、広島での住まいと生活には随分と苦勞させられました。広島駅に降り立って廃虚の中を通過して、先生と私の二人が大学にご挨拶に来てみますと、官舎も宿舎も用意されておりませんでした。案内をされましたのが翠町にありました割烹旅館でございます。名前はもう失念しましたが、「県会で懇意に使っている所だから当分の間ここに任んでくれ」ということでございます。四月の月末に支払いをしなければなりませんので、出された請求書を見ますと、当然、割烹旅館に泊まつてるわけですから、二人分の支払いがある程度まとまった額だったのです。そこで私は、こういう所に長く泊まっていたら東京のお宅に送るお金もなくなる、と思いついて、大学で、事務局長さん庶務課長さん等に実情を申しました。検討をされた結果と思いますが、用意されたのが、東千田町の大学の門を入りましてすぐ左側にあった、昔の武器庫を改造致しまして二階に疊の部屋を二つほど設けた、清風荘という名前だったと思いますが、文部省から出張なさったり、あるいは他の大学から非常勤講師において下さった方々をお泊めするために用意した場所でございます。先生の宿舎はそこに決めまして、私は尚志寮——大学会館の所に立っております。た木造の寮ですね——に住むことになりました。余談ですが藤原先生

が私の所に来られまして、「西村さんどうしてあの旅館を出たんだ。森戸先生に住んで頂くために、原爆の被害もあまりない、いい雰囲気の旅館をせっかく紹介したのにどうしてなんだ」とおっしゃる。私が「経済的な事情で……」とお答えしましたら、「県にお願ひするつもりだったので、お金を払わんでくれていいのに」と言われたのですが、事前にそういう説明が何も無い。「この支払いは先生をお招きした大学側が責任を持って処置を致しますから」というご挨拶がなければ、先生の財布を預かっている私としては悩むわけでございます。今では笑い話ですが、まあそんな話もございました。

しばらく経ちまして、先生が盲腸になられて日赤病院で手術をするということになりました。先生の健康管理の上からも西村と先生とを離しておくわけにはいかんということで、私もその清風荘に住むようになりまして。それから相当経ちましてから、日赤の隣に二軒長屋の官舎が建ちまして、そこへ先生と二人で引っ越して、おばさんを雇って食事の世話をしてもらうようになりました。ですから先生がご家族を東京から広島に呼ばれるまで、一年半くらいでしたでしょうか、その間は先生は私との同居生活をしておられました。

先生のそういう生活を文部省が非常に心配をされて、もちろん大学当局もそうございましたが、格別の予算を頂戴致しまして、草津の鉄道線路の上にごいました家を学長官舎として買い上げてもらいました。とは言っても、廊下の縁側が跳ね上がっているような状態でございます。それから、相当な修理をして、そこへご家族をお呼びすることになったのです。この家は海にも近くて恵まれた環境にありました。

また先生が使われる適当な公用車もありませんでしたから、これも文部省にいろいろと面倒を見て頂きました。

## ② 給料のこと

そのようなことをごさいましたから、初期の頃は、先生の給料で東京と広島の二世帯分の生活を賄っていかなければならない状態でした。その頃の先生の給料が、学長として、文部教官の一五級一号俸で、学長としては旧帝大に次ぐ処遇であったと思いますが、多分、国会議員の時の給料の三分の二近くになられたと思います。従ってご家庭の生活にも多少の犠牲を及ぼす状態を伴う結果となりました。

今だから申し上げて差し支えないと存じますが、通常のご家庭でも新学期や盆暮れには若干の物入りを伴うわけですが、留守宅に送金する額の工夫がつかない。思いあまって私は一番ご相談しやすい工学部長の中江大部先生に密かに窮状を申し上げました。中江先生はいろいろ思案されておられました。「ちよつと待つて」とおっしゃって、事務長をお呼びになつて、「あのお金何とかならんか」と言われる。その頃、大学の建設のための期成同盟会がありました。その事務局が工学部にありまして、工学部の事務長さんが金庫番をなさつておられたように思います。先生はその中から若干の融通をお考えになつたのでしよう。結果として拝借することができました。ご両人のご配慮と工夫の賜でした。私は数回にわたり、東京のご家族に送るお金をお借りしたことがあります。その時に、森戸先生の名前を出すわけには参りませんから、私の名前で借借書を書いて、中江先生と事務長さんには、「これはお返しするあてがございませんので一つよろしくお

願います」と言っておりました。森戸先生ご自身は私がそういうことをしたということは、一切ご存じありませんでした。後年、回顧談として奥様には申し上げたことがありましたから、ひよつとしたら奥様からお聞きになったことがあつたかもしれませんが、いづれにしても学長として広島大学に赴任した当時は、そういう意味では家計的には大変な苦難の道でした。

## ③ 文部省との深いつながり

私は、先生が文部省と非常に密接な関係にあつたということも、広島大学のためには非常に幸せだったのでないかと思えます。先生は先ほど申しましたように一年四カ月ほどの間、文部大臣をなさつていたほかに、国会でユネスコ議員連盟を作られました。その世話人をなさつておられました。また学長に就任された後も、日本学術会議の会員であつたり、日本ユネスコ国内委員会の副会長や会長を歴任された。国立大学協会の副会長をなさつたり、あるいは中央教育審議会の会長をなさつたりというように、直接間接に文部省とはいろいろなご縁があつたわけでございます。

確かに、あの時点でも文部大臣経験者はたくさんおられましたし、文部省とのつきあいが深い方も、旧制帝国大学の学長さんたちを中心にたくさんおられたと思います。しかし森戸先生ほど、歴代の文部次官や各局長さん方と人間的な交わりや信頼関係に裏打ちされた交流をされた方は他にはいらつしやらない、と私は思います。学長退任後の日本育英会の会長職就任などについてもそうですが、端的に申しますと、文部省の方々には、まさに先生が亡くなられるまでお世話になり

ました。先生が晩年健康を害されました時にも、文部省の次官の方々やその他の局長さんが、様々な条件を考えられて、東京医科歯科大学病院の個人病棟を確保されて入院をさせて頂きましたし、その後、何度も何度も病室にお見舞いに来て頂きました。また、亡くなられました後も、先生が関係されたNHK学園や労働科学研究所、あるいは全日本社会教育連合会、松下視聴覚教育研究財団の方々と一緒に、文部省関係の方々がいろいろお世話をして下さいましたし、先生を偲ぶ会を催した時にも、主催者側の中心メンバーは文部省の方々と、いろいろ相談相手になって下さったり、お手助けをして頂きました。そういう意味で私は、文部大臣経験者や学長経験者が数ある中で、先生ほど文部省との絆が深かった方はなかったように思います。そういうことを踏まえて考えれば、先生が郷土の、広島大学の学長にお就きになったことも、先生の人生の中で幸せな一面であったでしょうし、そのような先生を初代学長として迎えられた広島大学も大変幸せな大学であったような気が致します。

先生には、文部省の各種委員会の会議や、あるいは大学の予算要求等、いろいろなことがございましたので、ほとんど毎月一回は、上京されておられました。先生が上京される度に私も一緒に上京するわけでございますから、多分当時の局長さんや庶務課長さんは、私自身の旅費の捻出等についてもご苦勞なされたのではないかと推察致します。いずれにしても東京出張の度ごとに彦坂春吉さんという文部省の課長さん、——この方は先生が文部大臣の時の秘書官でございまして、秘書官になられる前は文部省詰めの朝日新聞社の記者でございました。

大臣秘書官を辞められた後に文部省の広報課長、それからユネスコ国内委員会の普及課長になられた方でございますが——、先生はその彦坂さんのデスクをご自分の連絡場所にされまして、上京の折には必ず各部局にご挨拶に顔を出されました。特にお願いをする案件がなくても、必ず顔を出されたんです。先生が文部省を訪ねられる時には、局長さんや部長さんの所に直接行かれるんじゃないやなくて、組織系統を尊重しまして、まず係長さんから課長さんへ、そして部長さん局長さんにご挨拶に行かれる、そういう風格の学長でございましたから、文部省の係長さん課長さんも全て顔なじみになりました。小さな気配りも含めて、大変良くして頂きました。そういうことがございましたので、先生の側も、文部省の側も仕事を乗り越えてお互いに頼り合う関係が築けたのではなからうかなという気が致します。

それから先生は、大学の地位を高めることと、大学、特に教育学部と文部省の結び付きに非常に心を配られました。文部省の視学官、あるいは教科書調査官等に欠員が出ました時には、必ず広島大学の先生を入れようということで、いろいろと努力をなさいました。その結果、一時期は相当数の方々が大学から文部省に意向をなさったのではないかと思います。例を挙げますと、教育学部の内海巖さんであるとか、あるいは平田嘉三さんであるとか、多くの方々が文部省に意向をなさいまして、広島大学と文部省との結び付きを強め、そしてお帰りになつてからは大学の教授に復活されまして、広島大学教育学部の地位の向上にいろいろ努力なされたような感じが致します。最近の教育界における広島大学の存在感を考えますと少々淋しい所感無しとしませんが。



ただいま申し上げましたようなことは先生にしかできにならない面ではなかったか、先生も学長としての満足感を味あわれましたでしょうし、そういう先生を、初代の学長として受け入れられた大学の関係者も恩恵を受けたのではないかという考えを深く致しております。

## 二、広島大学の地位向上に向けての努力

### (一) 中四国の中心大学に

先生は、広島大学の位置づけについて、ご承知のように三つの方針を立てられていろいろご苦心をなさいました。開学の時のご挨拶や、その他、学内外における講演等にもいろいろとそれが現れておりますが、一つは大学の水準を高めるために、広島大学を中四国地方の中心大学にしたい、と考えられました。それまで各行政ブロックには一つずつ帝国大学がございましたが、中国・四国のブロックにはそれがなく、たまたま文理科大学が広島にございました。従って先生は、文理大を核として、広島大学を中四国を代表する、いわば旧帝大に準ずる大学に育て上げたいと思っておられたのです。先生はそのために、中国・四国地区国立大学長会議を率先して主催されましたし、新設の政経学部を中心にして、先生が顧問をしておられました社会政策学会の総会を招致されようと努力されました。あるいは「開かれた大学」ということも先生の考え方の一つで、開放講座を設置をされまして、そこにはできるだけ著名な学者・文化人を招聘したいということで、学術会議の協力を取り付けられて、中山伊知郎先生などをお迎

えして講演会を開催されました。またユネスコと日本文学会の援助によりまして、主として広島大学と岡山大学との協力のもとで、近代産業と地域社会、近代技術の社会的影響調査という、調査をリードされました。これは岡山県の総社地方を中心にした調査でございましたが、六〇〇頁にわたる分厚い報告書が出版されました。広島大学では政経学部や教育学部、それから教養部の先生方を動員しましたが、その背景にはこういった総合調査を通して広島大学の社会科学系の先生方の研究水準を引き上げよう、という思いがあったのではないかと思います。

そういう意味で、先生はこれは別に依怙鼻頂や、あるいは好き嫌いということではなくて、教養部と教育学部と政経学部に関心をお持ちになっておられたように思います。当時の教養部は新制大学のまさに象徴的存在でしたが、先生は、特に教養部に人間形成と大学教育の基礎形成の役割を望まれていたように思います。従ってご自分が、教養部の学生諸君にお話する機会をできるだけ求めたい、そしてそれを非常に楽しみにしておられたように感じられました。

教育学部につきましては学部そのものはもちろんですが、同時に同窓会組織としての尚志会に関心を持たれました。その関心の中身は、伝統ある教員養成機関に対する期待感と新しい日本再建に関して教育学部が持つ教育の理念の形成ということでした。ですから尚志会の会員である各地区の校長さん、あるいは教育長さんの要請があれば、極力時間を工夫して講演に出かけられました。特に、沖繩教育会には、沖繩という地域が持つ格別の意義と、琉球政府主席の屋良朝苗さんが

広島高師の出身であったということ、また当時屋良さんのご子息が工学部在学中だったということもあって、格別の関心を持っていらっしゃいました。何回か屋良さんが広島大学の学長室を訪ねられる機会がありましたから、沖繩教育会について直接に屋良さんから聞かれたことが契機になっていいることは間違いないと思います。当時、沖繩はまだ日本復帰前でしたが、屋良さんの要請に基づいて数回沖繩に講演に行かれました、沖繩教育会の水準向上のために努力をなさいました。その時の報告書は、たまたま平塚学生部長が一度先生のお供をして参られました時の報告書ですが、私信の形で私の手元にごさいましたので、これも本日持って参りました。沖繩では、たまたま先生が参られました時慰霊祭が行われたこともあり、戦死なされた方々や、あるいは殉死なされた女子学生等にもひどく心を痛められて、先生が私に電報を打ってきまして、「できるだけたくさんの菊を送ってくれ」ということでしたので、沖繩の先生の所に奥様名でたくさんの菊をお送りしたこともございます。もちろん私費で、ご夫妻の心配りでした。

政経学部につきましては、私は、先生のお気持ちの中には、やがて総合大学になるであろう新制広島大学の主流学部にて育てたいというお気持ちがあったのではなからうか、という感触をもっております。と同時に夜間、いわゆる二部に非常に関心を持たれまして、これはご自分の生い立ちにも関係するかもしれませんけれども、働きながら学び、卒業する学生を、広島大学全体として応援したいという熱望を持っていらっしやいました。ですから外部からお呼びする非常勤講師の人選

等について学部側から相談があった時には、先生もそのためにいろいろお力を尽くされました。例えば、京大で社会政策を専攻されていた服部英太郎先生をお迎えする時の、先生のご努力と、官舎で夕食をもにされて歓談されるなどのご配慮には本当に頭の下がる思いが致しました。

それともう一つ、先生ができるだけ早く政経学部専任の学部長を選ばないと秘かに苦心をなさったことも是非お話しておきたいと思えます。政経学部が新設されて以来、学部長は、文学部長でございました渡辺鼎先生が長く兼任をなさっておられまして、専任の学部長がおられませんでした。そんな折り、たまたま一時期、やむなく大学を去っておられた先生方が、復職されるという新聞の記事を見て、交友関係にあった東北大学の新明正道先生を政経学部長にお呼びしたらどうだろう、と先生と二人で相談をしました。奥様も大変喜ばれて、先生は早速、新明先生宛に速達を出されまして、「もしも可能性があるならば、今日、明日にでも仙台に行ってお話をしたい」と口説かれたのですが、たまたま新明先生の方にも東北大学から、「是非大学に復職せよ」という要請があつていて、広島の方はお断りされ、実現には至りませんでした。そのことについては、「これはお引き受け頂いて確定したら、その時点で政経学部の先生方にご相談をして、一つ自分のわがままを叶えて欲しいと頼むから一切口外してはならん」という先生の口止めもございまして、広島大学におられました先生方も、事務局の方も一切ご存じではありませんでした。実はここに、新明先生から森戸先生に宛てたお断りの手紙がございます。何かの機会に、そういうこと

で先生がいろいろご苦勞をなさったということを知って頂きたいものと私が取っておいたので、持参しました。五十年史の編集事業にも役立つことができるならば幸いに思います。

### (二) 地域性のある大学に

それから、先生の第二の構想は「地域性のある大学」、広島大学を地域性のある大学に育てたいということでした。先にご紹介した国会での議員辞職演説にも出てきましたが、平和に対する広島市の役割について、非常に強い関心と責任とを持たれておりましたのと併せて、大学に是非、平和科学研究所を設立したいという、強い念願をお持ちでした。そのために何回か文部省に行き、予算についての相談もしましたが、他大学にも全く類例がないような新しい研究所を作ることについては、文部省もいろいろ悩まれて、なかなか進行しませんでした。そこで先生は、それでは文部省に認可されるまでの間、学内で何とかその基礎作りを致したいということで、平和科学研究所の設立趣意書を作られまして、政経学部や教養部の先生方を中心にして、まず広島周辺の平和運動に関連する方々に呼びかけて、研究所を作ろうとなさいました。先生は、「そういう新しい研究所を作る時には、外部に理事の方を求めて、寄付金をお願いすることが世の中の常だけれども、理事や発起人をお願いする方々には財政的な負担はかけたくない」という希望を語られて、細々でもいいから自分たちでまず始めようということで趣意書を作り、著名人の方々に発起人としてのご賛同をお願いしました。その結果、多くの方々からご承認の手紙を頂

戴しました。私の手元にはその趣意書と事務局その他の役割を分担する先生方のお名前の記録はございますが、学外からお呼びする、ご賛成を得た方々の署名簿が残っておりませんので具体的なお名前を申し上げることはできません。多分事務局担当の、お亡くなりになりました久保良敏教授の研究室に残されていたのではないかと存じます。また先生は、地域の文化に触れて、広島県出身の画家や彫刻家の作品を、ご縁を求めて集められておりました。角浩さんの絵や円鏝先生の彫刻の原型などもその一つですが、先生の心が尊重され、これらの作品が分散されずに、一堂に集められて展示されますように願っております。

そのほかにも、中国・四国の各県にユネスコ協会を設けること、その会長さんにはできるだけその県の国立大学の学長さんをお願いしたい、という取り組みにも積極的に参加されました。もちろん先ほど申し上げました大学の開放講座等についても、地域性のある大学としての特色作りをしたいというお気持ちの現れだったと思います。

「地域性」ということに関連して言えば、先生の心の中に引がかつたのは、教育学部の分校と附属校に対する処置の仕方であったのではないかと思います。先生は福山市のご出身でございましたので、先生の選挙の基盤は、福山・尾道・三原・府中・因島等でしたから、福山分校と三原分校に関する陳情を受けられる時には、何と言いますか、郷里と結び付いた父兄の熱烈な希望を承るわけでございますから、先生の心の中には、やがて総合大学となった時には教員養成学部は統合すべきであろうというお気持ちはあったように私は推察しておるんで

すが、附属校については、地域の方々のためにもできれば残したいと思っておられたのではないかと推量しております。当時、各市長さんや商工会議所、あるいはPTAの方々を中心に、附属校も分校も広島に統合されるのではなからうかという危機感が広まっております。ですから、何度も何度も陳情がありました。先生も大変にご苦労をなさっていたように思いました。

それから広島につきましては、県と市にできるだけお力添えをする、あるいはご相談相手になるということのほか、マスコミ機関としてのNHKと中国新聞に関心をもち、いろいろお力添えをなさいました。また商工会議所、それから国鉄等についても経営委員を引き受けられました。多忙な時間の中でそれらの会議にも参加されました。ロータリークラブに關しまして、広島大学長とクラブとの関係の端緒も先生であったと思います。先生は大学と地域との交わり、地域から期待された事柄については極力参加し、力添えを厭わないお人柄で、学外のいろいろなことについても積極的に参加をなさいました。

### (三) 国際性のある大学に

先生の第三の構想は、「広島大学を国際性のある大学に育てたい」ということで、ご存じのように、平和文庫の本の寄贈や、植物の種子の寄贈に関するお願いを世界中の大学になさいました。これらは全く先生の独自のご判断で、ご自分で日本語の書簡を書かれ、翻訳をして頂いたものを何度もご自分で手直しをなされるなど、この企画には終始一貫して先生ご本人が関わられました。従って、各大学から頂戴致

しました文献の将来の拡充であるとか、あるいは頂戴致しました木や苗の育ち具合には、大きな関心と愛情を注がれました。「この木はこの大学から、いつご寄付を頂いたということが分かる表札を立てて、大学の中に国際的な雰囲気醸成させたい」と語られ、「特にフェニックスは、灰の中から甦った広島大学の象徴にしたいから是非大学の正門の前に植えたい。メタセコイヤはとこしえの象徴として正門通りの並木としたい」など、大学の将来構成についての先生の夢はどんどん膨らんでいった様子でした。

本日、お伺いしました、この立派なキャンパスに先生の想いが見受けられないのが残念です。メタセコイヤなどは挿し木でも大きくなる植物ですから、是非移植して頂きたいものと存じます。大学に託した先生の願いは、在任中に作られました大学歌や大学の襟章にも物語られていたと思います。

先生はまた、日本の大学を代表した国際大学協会の理事であるとか、あるいは日米両政府間による日米文化協力会議の議長などを歴任されましたので、それらを通じて広島大学の名前と地位を高めることについて、直接間接にいろいろお役に立とうとなされました。

また、平和大通り沿いにアメリカ文化センターがありました。これは占領政策の一環として作られた図書館で、教育水準の向上に役立つ施設として利用されていましたが、その館長さんと懇意にされておられました。英語教師の招聘の際にお世話になりました。また先生は、広島大学の先生方にできるだけ多く海外留学や視察の機会をお与えになろうとされて、このアメリカ文化センターやABC等機関

との協力関係作りに尽力されておられました。そのおかげで、戦後まもなくの時期ではありましたが、政経学部の堀川武夫教授や田村泰夫教授、山下寛太郎教授、あるいは文学部の榊井迪夫教授など多くの先生方が海外に出る機会を得られました。私も若干のお手伝いをしたものですから、海外からの礼状や、留学期間延長のお願いなどいろいろな手紙を頂戴しました。そのうちのいくつかをご参考に本日持参しております。

### 三、広島に根を下ろして

#### (一) ご夫婦それぞれの活動

これは先生がご家族を広島に呼び寄せられた後のこととなりますが、先生ご夫婦は、せっかく広島大学に来たんだからということで、学長官舎に教職員や学生をお招きになったり、家族ぐるみで地域奉仕をなさったりということにもいろいろと意を用いられました。草津の学長官舎には庭に面した所に一〇畳ちよつとの広間がございまして、そこに年に何回か定期的に学部長さん、研究所長さん、図書館長さん等をお招きして一緒に会食をする、それから主として政経学部、教育学部、教養部などの先生方をお招きをして一緒に懇談会を開く、時には学生さんや、大学の記者クラブにいるマスコミの記者、それから町の有力者の方々等をお呼びになって懇談会を持たれたりしておられました。これは打ち解けた雰囲気の中で交流を深めるとともに、裸の意見を看取するためにも、大変に有意義な試みであつたように思います。皆

様も楽しみにされておられました。記者クラブは、私が広島大学に来た時に、大学に出入りしてありました有力新聞の記者の方が、「是非記者クラブを作つて欲しい」という話をされましたので、事務局長、庶務課長さんにお願いを致して、当直室の横に一室を設けたものが大変な役割をもたらしました。

先生はまた「百まで働こう会」、奥さんは「有花会」という会に参加されました。地域の高齢者や婦人の方々との結び付きを持たれました。有花会はご婦人方に呼びかけられて組織した、広島をできるだけ花一杯の都市にしたいという願いから活動が始められた会です。現在はどうなっておりますか分かりませんが、NHKがあります平和大通りから平和公園に入ります所の両脇に味の素株式会社からお金を頂戴して、大通り公園内では初めてそこに花壇を作りました。その他にも、アメリカ文化センターの前方等にも花壇を作りましたし、地域婦人会からの要請で桜並木を植えたこともありました。また広島に文化人を呼んで来て交流するという事業も行いました。例えば画家の林武氏や三岸節子さん等をお招きしてお話を伺うということもされました。あるいは先生が広島大学に参ります時に直接間接にお世話になりました。旧来の友人である大内兵衛先生や河上丈太郎・三輪寿壮さん、あるいは国立大学協会で大変知己になりました東大の茅誠司先生などに対しましても、家庭的にもいろいろ気配りをなさる奥様でして、そういう方々との交流がひいては広島大学の位置づけに言い知れぬ寄与をもたらしたと存じております。

## (二) 東京からの呼び戻しの声

ところで私は、先生の学長在任中に非常に気がかりなことが二つございまして。一つは国立国会図書館の館長に先生をお呼びしようという動きがあったことです。文部省あるいは国会図書館の職員の方々の中から、是非先生を館長にお招きしたい、という声が多めに挙がってきたのですが、これは結果的には実現しませんでした。それからもう一つは、当時の内閣が、憲法調査会の会長として森戸先生に白羽の矢を立てたことです。こちらは新聞にも報道されたように、かなり現実味を帯びたお話で、当時の岸内閣の三木副総理が草津の学長官舎を非公式に訪ねられて、先生を口説かれたほどでした。先生は、国会の憲法小委員会の委員の経験もございましたし、それから委員の方々が先生の人柄を非常にお認めになられていたこともあって、副総理直々の要請になったのだと思います。

先生もまた憲法については特別深い思い入れをお持ちでした。先生独特の主張は、「ドイツの新憲法の中には、国が独立をしてある年月が経たらその憲法を承認するかどうか国民投票にかけるという規定がある。ところがわが国の現行憲法の規定にはそれがない。日本にもそういうシステムを導入して、日本が独立をして一〇年経ったらこの新憲法を国民投票にかけて信任を問うという項目を憲法改正の項目に附記したい」という趣旨のものでした。そして実際に、先生は憲法小委員会ですという動議を出そうとされて、主もだった委員の方々にご相談されたんです。ところが、「今、新憲法の審議が軌道に乗りはじめようとしている時に、そういう動議を出されるといろいろGHQとの

間に問題が発生する恐れがあるから、それは言わんでくれ。将来、そういう希望があったことについては自分たちもよく承知しておくから」というのが大方の反応でした。三木副総理やその周辺の方々が、このことをよく覚えていらつしやって、憲法調査会の会長に森戸先生を、という声が起こってきたのだと思います。そういう事情もありましたから、先生は何日間か熟慮をなされましたが、広島大学にきてまだ途半ばであるのでこの時点で学長を辞めるということについては、自分としては潔しとしない、と心を決められ、その月の月末に上京致しました時に三木副総理の所をお訪ねなされまして、正式にお断りになりました。

## 四、医科大学の包括と医学部創設のこと

先生が広島大学を総合大学にしたいとの執念を燃やされたことも、忘れるわけには参りません。総合大学にするためには医学部がなければならぬ、そこで当時、呉にあった医科大学を、是非広島大学の医学部にしたいと考えられたのです。この度、五十年史編集室からお送り頂いた「広島大学二十五周年史」には、広島医科大学が創立当初の広島大学に参入しなかった経過が詳しく書かれてありましたが、森戸先生の思いの背景には、もう一つ、広島大学の中に原爆障害の研究と治療に関わる特別の部署を設けたいということがあったと思います。広島にはご存じのようにABCという原爆症の調査研究所が比治山にございましたが、ここは調査研究の専任機関でございまして、原爆を

受けられました方々についての診察治療を致しませんでしたために、広島市民や被爆者の間にそのことに関連して悪い印象があり、それが反米感情につながる恐れのある雰囲気がありました。先生は非常にこのことを心配されて、何度かABCに参られまして、所長さんとも懇談をされたりなさっておられました。結果的には、医科大学を広島大学に吸収して医学部を設置し、原爆医療機関を併置したいという方針を決められました。医学部の設置につきましては、文部省側のプランとの兼ね合いだとか、ABCを譲り受けて学部的基础組織にしたらいいか、いろいろな話がございましたが、それらについても、『二十五年史』に書いてございますから私は改めて申し上げません。ただその際に先生は、広島大学だけでは問題が多いので、長崎大学と両方に新しい病院を建設する費用をアメリカからもらって、新生医学部の基礎作りをしたいと考えられまして、文部省やABC等に陳情や建議をなさいました。

ここまでの話で、いくら私が秘書として先生のお側にいたとはいえ、なぜこのように細かいことまでお話できるのかと思われる方もいらっしゃるかもしれません。実は先生は、ユネスコだとか国際大学協会だとかの会議のために海外出張されます時には、必ずといっていいほどご自分の思いついたことや気づいたことを手紙に書かかれて私によこされるんです。その町の景色だとか、市民生活の様子だとか、そういうことはほとんど書いてなくて、ご自分の仕事のことについてだけ書いてある手紙がほとんどです。その中の一通に一九五六年一月一六日付のニューデリーからの手紙があります。この手紙にはただいま申

し上げたことに関連して、私に対する数々の指示が書かれております。ちよつと読ませて頂きます。

お手紙を有難う。病院建築についての報告拝見。最初の手紙で、話が後戻りをしたようで、時間の浪費になることを心配してました。東京で医学部長と庶務課長に問題の所在を明確に申しておいた筈で、その諸点を相談してもらおうことでありました。

- 一、問題はこちらから提出して文書にあるように四億円の病院建築の中、アメリカ側でその1-4を寄附して貰うという要請にもとずき、先方から日本政府は来年の予算でいくらかのために支出するのかが、それが判明しないと寄附はむずかしい、と申入れがあった。それでこれにたいしてわれわれとしてはどうしたらよいか。私の案は
- 二、まず県の寄附を国の金と同様の性質であることをアメリカ側に了解してもらい、そのことを文部省にも承知して貰う
- 三、次に、広島大学では、至急二億五千万円中この目的に充当しうる金額をきめ、米国の寄附を含めた新築計画をたてる
- 四、このことを文部省に話し、さらに来々年の予算に病院建築費を計上して貰うよう依頼し、できればその内諾をえる  
(電話で田中次官に話しておいた)
- 五、以上をきめた上アメリカ側に了解をえる。

第二の手紙だと大体この線に副うて話が進んでるよう形で結構です。

(四)の点がまだ手が打たれてないのではないかと思います。河合前部長にはよく現実の事態を知って交渉に当つてもらわなければなりません。まず二、三、四の点を固めてホルムス所長に力添えを願うのがよいと思います(後略)

かような手紙が私の所に届きました。これは先生が遠くインドの地でも大学のことを常に心配されて、私を通して医学部長や事務局長に事細かに指示を与えられていること、その際に文部省やアメリカ政府、さらには長崎大学との協力をタテにして進めるという方策に細心の注意を払われていること等がよく分かる手紙だと思います。

この件につきましては、文部省予算との兼ね合いなどから実現しませんでした。先生は辛抱強く努力をされておりました。翌々年の一九五八年九月一日付、国際大学協会に出席されたカナダからの手紙に「病院(広大・長大の病院)の件は、事務局長に手紙しておいたから、北村佐太郎氏にも依頼することにならう」と書かれております。お調べ頂きますれば、関係資料が大学事務局や医学部内に残されているのではないのでしょうか。

手紙という形で私に指示が与えられるということとはたくさんありました。そういう手紙が残っているからこそ、その時々を事情を思い出すことができたのです。もちろんその当時から長い時間が過ぎ去っていますから、忘却の彼方になつている部分もありますが……。

医学部のことと言えば、移転や拡充の予算工面についても思い出すことがあります。私は先生のお供をして、信濃町にありました池田総

理のお宅までお願いに参つた記憶があります。日時は覚えておりませんが、総理の秘書官から、早朝七時半前後に「自宅に来て下さい」という連絡を頂いて、翌日の七時過ぎくらいに信濃町に駆け付けたことを、今でも明確に覚えています。お宅に伺いますと、その広い玄関先にもう既にお客さんの靴がずらりと並んでおりまして、私が数えまじたら七〇数足ありました。「総理大臣の所にはこんなに早朝から陳情に来る人がいるんだな」と、驚かされたんです。それで先生が行かれますと、すぐに奥さんと秘書官が出て来られました、それほど皆さんの方が待つておられましたのかかわらず、すぐに総理に面談させて頂きました。私はその面談の席には同席できませんでしたが、戻つて来られた先生が大変安心したお顔をなさっていましたから、私には、医学部の移転・拡充の予算については明るい見通しを得られたんだな、という感じを受けました。

長々とお話させて頂きましたが、これらが森戸先生と広島大学との間にまつわる私のささやかな思い出でございます。

## 五、人間・森戸辰男像

最後に、「人間・森戸辰男」ということで、多少雑談をさせて頂きたいと思ひます。

### (一) 秘書としての喜びと苦勞

私は昭和二四年の一月一五日付で思いがけずに、衆議院議員としての先生の公設秘書になつたわけですが、その時に先ほど申し上げまし



た彦坂さんという課長さんは胸を病まれました療養所に入院をなさっておられました。そこで奥さんが、「これまでの秘書の中で、彦坂さんほど立派な秘書はいなかった。だからお見舞いに行つて、秘書の仕事のあり方を教わつていらつしやい」と言われたんです。当時、みんなが貧しい時代でしたが、奥さんは私にバターとチーズを持たせて下さつて、私は千葉県の佐倉の療養所に参りました。彦坂さんに「今度先生の秘書になりましたので、是非秘書の心がけを教えて欲しい」と申しましたら、彦坂さんは三つのことを私に教えて下さいました。一つは、森戸先生という方は、常に温容で、感情の起伏が普通の人と大変違ふということです。私どもが相手に対して、「それは非常におかしい、そんなことがあるんですか」と憤慨するような時、森戸先生はそういう感情を顔に出さずに、「君それはどうかね」と言われる程度の表現をされる方だから、そう言われたら、普通の人が、「そんなことがあつていいのか」というほどの感情の高まりにあるんだということをよく理解して対処することが必要です、と教えられました。先生はそういうお人柄の方で、事ある時に先生の感情が今どの程度の所にあるかということは言葉遣いや仕草で推測し、わきまをえなければ仕事はできないよ、とのことでした。

二つ目は、先生の寡黙な性質についてのことです。先生は普段から微に入り細にわたつて詳しく説明をされる方ではないから、要点を指示されたら、それについてあとどんなことが不足していて、何を付け足せば要求されていることが達成できるのかを、秘書の側が気配りや推測をして対処していかなければ仕事は勤まらない、ということでした。

三つ目は、運転手さんに好かれる秘書になりなさい、というアドバイスでした。役所にも、大学にも専属の運転手さんがおられますが、運転手さんには職人氣質の人が多く、その運転手さんが、声を掛けたらすぐさま本当に親身になつて、多少の無理をしても車を出してくれるような人間関係を作り上げなければ秘書の仕事はうまくいかないから、まず運転手さんに好かれるようになりなさい、と言われたんです。この三つの教えは、先生とご一緒に仕事をするようになって本当に役立ちました。私が大過なく過ごせたのも、これらの指導の賜であつたと感じております。

## (二) 趣味のこと

先生の趣味は釣りなんですけれども、特に川釣り、鮎釣りを好まれました。海にも忠海なつみに憩意な漁師さんを決めまして、電話を一本入れるとすぐにその漁師さんが船を用意して下さいるような間柄でしたが、どちらかという川釣りがお好きでした。ある時私が、「先生、どうして川釣りがいいんですか」と聞きましたら、「海釣りは船頭さんがよく釣れる所に案内をしてくれて、今がちょうどいい時ですから針を下ろしなさいと言う。でも川は船頭さんがいない。自分でどこへ行つたら釣れそうかということ自分で判断する。いわゆる釣りの自主性があるから川釣りが好きなんだ」と説明されました。この言葉にも先生の人柄がよく表れていると思います。

釣りのための仕掛けや針作りも全て先生の手作りで、他に手仕事などまったくされない先生としては不思議なほどの気の入れようでした。

また先生は釣りはしても、釣ることだけに専念してたくさん大釣りをするにはなかりませんでした。「釣りすれども綱(ながしぱり)せず」と言われ、釣りをただ楽しむ、という考えの持ち主でした。先生の釣り好きは、文部省の外郭団体である日本釣魚振興会、この会は釣ると同時に、魚を増やす工夫もするという会でございましたが、そういう釣りの会の会長をされるほどでした。先生の釣りには毎回お供しました。文部大臣の時に、大臣に事故があったら大変だからということ、秘書官が先生の腰に綱を結び付けて岸の方からじつと釣りの様子を見守っているという漫画が『週刊朝日』に出たこともありました。先生は真岡に疎開をしておられて、近くの鬼怒川で釣りをしている間に増水があつて九死に一生を得た、溺れて死にかけたことがあるものですから、新聞記者や秘書官が心配したんでしょね。心配りのある漫画でした。

広島に来ましても、地域の方々がこのことをよくご承知で、「釣りで先生の講演を釣る」というようなことも多々ございました。つまり講演の依頼をされる時に正面から用件を言わずに、「鮎釣りにいい川があります」というふうを持ちかけられるんです。釣りの話で先生の気持ちにくすぐろうという作戦なのですが、先生もこの作戦には弱くて、「西村君、何日と何日は空いているだろうか」と、スケジュールを確認される傾向が多々ございました。

先生は年をとられても、やっぱり半ズボンに草鞋掛けで、川はコケで滑るもんですからもっぱら草鞋で、釣りに行かれていました。鮎釣りを殊の外愛好されていた先生は、竹の釣り竿も立派なものをたくさ

んお持ちでした。釣り竿は常に手持ちをされ、立てかけること等は戒められ、本当に大切になさつておられました。川は流れがある上に、先生はもうかなりお年でしたから、釣りの途中に釣り糸が引つかかりますと大変でした。そんな時は私の方を向かれるんです。私は川の端から端までを泳いでいって、引つかかった糸をほどいていたものです。公私ともに一緒に、まさに先の漫画の再現ともいえるべき関係でした。

### (三) 先生の健康法

これも笑い話ですが、先生は非常に自分の健康に気をつけられる方でした。「お酒は大変美味しく、多分強い方だと思うが、自ら求めて飲むことはしない」という主義でした。ですから学長時代には宴席でもほとんど飲まれました。ご一緒しました時には係の方にお願ひして、先生の徳利の首にひもを結ばせて、その中に番茶を入れさせて傍らに置きました。相手の方とお酌のやりとりをする時には、女中さんが先生に番茶をつがれていたんです。先生は宴席でのお話し合いにも心配りされて、常にいつもにこにこされておられる風采の方でしたから、ご自分が飲まない時でも人の気持ちをそらすようなことは全くされませんでした。

それから非常に果物が好きな先生で、あの酸っぱい夏みかんを必ず丸々一つか二つご自分で召し上がりましたし、朝晩の体操も欠かされません。有名なのは、寝台急行で出張致しますと、浴衣で、降り口の少し場所が空いている所で必ず体操されるんですね。ですから列車の車掌さんやボーイさんには、「先生の体操」と言われて大変有

名でした。

また、身だしなみについてはあまり気を使われる方ではありませんでしたので、ほとんど奥さんと私がいろいろお世話を致しました。例えば宴席で食事をされていて、口元や襟に食べ物が付いても気付かれない。私がそつとハンカチで拭く仕事をすると、ご自分もそこを拭く。細心な、私どもとは異なった幅の広い人間性の豊かな方でした。

#### (四) 私と森戸辰男先生

私は、大学三年の時に大学の推薦を受けまして、日本労働組合総同盟の調査部に入り、労働法の担当をしておりましたものですから、将来は労働界で仕事を致したいと思っておりました。その時点では森戸先生とは個人的におつきあいは何もありませんでした。学生時代に民主社会主義学生同盟の役員をしておりましたから、社会党にも出入りをしていて、間接的に遠くから先生のお顔を拝見するくらいで、直接的な関係はありませんでした。

大学を卒業して、ちょうど社会党や総同盟で左右の対立が激しくなりました頃、体を悪くしまして、北海道で臥せっておりました所、昭和二三年の一二月に、森戸先生から速達を頂戴しました。手紙を拝見しましたら、「秘書になってくれ」という内容でした。これは後から伺ったことですが、清水慎三さんという信州大学の社会思想史と政治学の教授をなさった方と、野田福雄さんという東京学芸大学で憲法や社会思想史の教授であった方、お二人とも先生のお弟子さんであり、お友達でもあり、話し相手でもあるという方でしたが、このお二人が、

「秘書に適切な人間が誰かいないか」という先生のご相談に、偶然にも「西村という男がいるから使ってごらんになったら」と推薦をされただけです。私は病氣中でございましたからお医者さんに相談しました所、春になるまで療養が必要ということでしたが、自分が尊敬する人物に仕事を手伝ってくれというお声掛かりを頂いたことから、男の一生に何度もないことなので、是非行こうと思ひまして、お正月の三ヶ日が過ぎました時に上京しまして、国会の先生の部屋にご挨拶に参りました。その頃はちょうど社会党が分裂する寸前の時期で、西尾末広、松岡駒吉、西村栄一さんなどの諸先生方が集まって、カーテンのむこうで会議をしている真つ最中でした。そんな中、「私が速達を頂きました西村です。出て参りました」と言いましたら、先生が「君そこでちょっと待っていてくれ」とおっしゃいます。待っている間、私自身は秘書の仕事はこういうことで、こんなことをして欲しいとか、お給料や勤務時間などについてのお話があるんだろうと思っておりましたら、会議が終わって皆さんお帰りになりましたら、「今日は君が来てくれたから早く帰るか」ってこれだけ言われるんですよ。それじゃあ、と先生の鞆を持って、荻窪のお宅に一緒にお供して参ったんです。お宅に着いたら、先生が「おーい」って奥さん呼びましてね、「この人が今日から僕の秘書になった西村君だから頼むよ」と紹介されて、それで一件落着、私は秘書になってしまったんです。先ほどもお話ししましたが、広島に行くことになった時もそんな調子でした。「君、それじゃあ広島と一緒に連れて行くか」ってというふうな。さすがに奥さんは、「西村さん、あなたお給料今おいく

ら」って確かめられて、「七千円もらっています」とお答えすると、今度は先生に向かつて、「今、七千円で無理に頼んで行って頂くんだから、いずれ結婚もするだろうから、あなた大学と文部省にお話して一万円もらえるようにしてあげて下さい」と言っておきました。先生は「うん分かった」と返事されましたが、公務員の給与規定は勝手にいじりませんから、先ほど申し上げたように先生同様、私も七千円の給料が四千数百円に下がってしまった次第でした。

広島では、私が結婚するまで先生と同居生活をしておりまして、結婚して別居してから後も、家族同様出入り自由で、先生が出張される時には、私が全部タンスから衣類を引っ張り出して用意する間柄でした。先生がホテルで休まれる時には、いつも枕元に「先生これ明日の着替えですよ」って言って置いておくような……。

同居中や出張時のお金の管理も全部私でした。先生の財布にいくらかお小遣いをいれると、後は全部私がついて、支払いも何も私がしました。そして給料袋の後ろに明細を書いて奥さんに、これだけ余りました、と渡すんです。

先生は講演に行かれます時には几帳面にお話の要項のメモを必ず書かれるんです。気軽な即席の話はなさらない。それを全部封筒に入れて、箱にさしてあるんです。講演のお仕事の時は、必ずそのメモ類を汽車の中でやら、自動車の中で更に手直しをなさって講演をなさいました。ですから先生が、「西村君あれとあれの封筒」って言われると、「はい」とすぐに渡せなければならぬ。先生はまた読書家で、出張時には必ず本を数冊入れたポストンバックを別に持参される。奥さん

が「重いから一、二冊、必要なものだけに」と言われると、「読みたいと思うものは持っていく」と答えられるのが常でした。そういうわけで、私には、文部省の親しい方の間で「移動図書館」というあだ名ができました。先生が読みたいと思われそうな本は全部、私がポストンバックに入れて持って歩いていくということもありましたから。

秘書になって以来、特に広島にお供してから、公式には政経学部の教官として、日常は秘書室に常駐しながら、私的には森戸家の家族同様というような存在になりました。ですから先生からもいろいろなことについて公式非公式にご相談も受けましたし、大学の事務局長や庶務課長さんにも対等にこちらからお願ひしたり、相談を持ちかけられました。また学部の先生方とも序列を抜きにしているいろいろお世話になったり、わがままも言わせて頂きました。そんな立場だったからこそ、草創期の広島大学のためにお役に立たせて頂いたんじゃないかなと思っております。

私の青春は森戸先生とともにありました。従って先生が広島大学を去られます時に、広島大学に残って研究生生活を続けたいかどうかという方もおられましたし、それから事務局長さんなどからは、「公務員に止まるなら、他大学の学生課長に推薦するから文部省に残りなさい」というお勧めも頂きましたが、結局、先生と一緒に東京に帰ることに決めました。私は先生にお供して広島大学に来て、そして自分の青春の一番大切な時間を、先生とご一緒に過ごさせて頂きましたので、まあこれが人生観から言って得だったか損だったか、そういうことを考え始めれば、いろいろな問題があるかもしれませんが、先生の

秘書になったことにも、広島大学で過ごしたことにも全く悔いはありません。

先生は広島時代に最愛の奥さんを亡くされたので、東京に戻られましてからはお子様との生活でした。周囲から、「再婚されては」というお勧めが強く、松下電器の婦人福祉課長をなさっておられた現未亡人とご縁あってご一緒になりました。再婚された後、「一度来い」というお声を掛けて頂いて、先生のお宅へ伺いました。

そうしたら先生は、その新しい奥さんに、「家の親類にもいろいろある。遠い親類もたんさんあるけれども、遠い親類よりはこの西村君に眼を掛けてくれ」とおっしゃいました。それを聞いて私は、何と言いますか、中年になって新しい人生を歩まなければならないという不安の中になりましたが、それまでの苦勞が吹っ飛んで、男冥利に尽きるという、まさしくそういう思いを味わって、大変感激したことを覚えております。

先生と広島大学との関係、それから私個人が感じました「人間・森戸辰男」の姿につきましても思い出すままにお話を申し上げました。皆様方が大学史を作るといふ重要なお仕事をなさっておられますことについて、多少でもお力になるお話ができたかどうか大変心許ないものがございますが、時間も大幅に超過してしまいましたので、恐縮でございますが、この程度でお許しを頂きたいと存じます。

《講演記録掲載にあたっての付記》

講演の翌日、広島市中区東千田町の広島大学跡地を訪ねました。

立派な公園として整備された様子を見て感銘を受けました。特に創立当時の先生のご意志が明記された案内板を拝見した時には、有り難い思いがこみ上げて参りました。

(にしむら ひろし・元広島大学政経学部講師)

本稿は、広島大学五十年史編集室主催第三回研究会（一九九八年十二月十四日）において行われた講演を文章化したものです。草創期の広島大学と森戸辰男氏に関する貴重な事実を伝えるものであり、西村博氏に厚くお礼申し上げます。

(広島大学五十年史編集室)